

生活面においては、不正受給の防止や金銭管理といったチェック・監視的な役割が主であり、受給者をエンパワーメントすると発想とは無縁であったとえる。厚生労働省がモデルとして示したハローワーク連携型のプログラムも就労自立支援の視座にたつものであり、社会生活自立、日常生活自立に関連したプログラム実施は極端に少ない状況にある。

そうした現状にあつて、関係者の間で、釧路市を嚆矢とする社会生活自立と日常生活自立の回復を基盤にすえた長期的な就労自立を支援する取り組みに注目が集まっている（以下、「生活支援・社会参加型」自立支援プログラムと呼ぶ）。

こうした「生活支援・社会参加」型の自立支援プログラムは、これまでの生活保護行政の援助実践と視座と方法が異なり、その運用に直接的に関わる現場職員には新たな専門性が求められている。「生活支援・社会参加型」のプログラムは、その関心の高さとは裏腹に普及のスピードは遅い。

「生活支援・社会参加」型のプログラムは、地域のNPOや民間企業と協力して、被保護者がボランティアとして「働く」場を作り出さねばならず、そのために時間がかかっていることも予想されるが、最大の原因は、地域の諸資源をネットワーク化し、社会的居場所における人の回復を支援する役職を誰が担うのかに二の足を踏んでいることにあるのではないか。すなわち、「生活支援・社会参加型」のプログラム担当者がどのような専門性をもった人材を配置するかに関する情報の不足が、問題になっていると筆者は考える。

以上の問題関心から、本稿では、釧路市とそれをモデルとする大牟田市における支援実践の実状から、その抽出を試みる。

2 方法

2-1 役割と専門性の抽出方法

本稿では、自立支援プログラムの直接的な企画・立案・実施に関わる現場職員2名の実践から、求められる役割と専門性について考えてみたい。一人は、「生活支援・社会参加」型のパイオニアである釧路市において、自立支援プログラム草創期に自立生活支援員を務めていた黒田さんである。彼女に対する周囲の評価は極めて高い。もう一人は、釧路をモデルに同種の活動をする大牟田市の自立支援相談員の太田さんである。

分析方法は次のとおりである。まず、全文テープおこしたトランスクリプトを通読した。関わりのありそうだとと思われる箇所全てに線や印をつけていった。次に、そうした線や印を比較検討し、関連するものにあてはまるカテゴリーを探していった。第一段階では、5つのカテゴリーが生まれた。

その後、もう一度、印や線を増やしながらかつ読した結果、カテゴリーは8つに増えた。さらに、線や印と生成したカテゴリー間を比較検討し、自分が納得できるまでカテゴリー名を精査していった。

2-2 分析上の補足参考データ（これまで行ってきた調査研究、関わり等）

■本科研での調査活動

- ①釧路市生活保護受給者の生活実態調査（昨年度報告書添付）
- ②釧路市自立支援プログラム参加者への個別聞き取り調査（添田 2010）
- ③大牟田市自立支援プログラム受け入れ機関への訪問調査

■釧路市生活保護自立支援プログラム

第二次ワーキング・グループとしての調査

- ①プログラム参加者へのグループ面談
- ②プログラム辞退者への聞き取り
- ③ケースワーカーへのグループ面談
- ④受け入れ機関訪問調査

■釧路市福祉部生活福祉事務所編集委員会

(2009) に掲載の黒田さんの実践記録

2-3 主たるデータとなる面接調査

【面接調査1】釧路市自立生活支援員

■日時と方法

協力者：黒田さん（女性・40代半ば）

日時：2010年7月

会場：北海道教育大学釧路校

方法：添田が主として質問役、中園が適宜補足説明を求める。学生2名傍聴。半構造化インタビューで約2時間。

事前に用意した質問の柱：

- ①プロフィール
 - ・経歴、職歴、応募動機、自立生活指導員として働きはじめたこと
- ②就業体験的ボランティア事業における自立過程
 - ・印象的なエピソード、就労にいたった例、就労を左右するもの
- ③自立生活支援員の専門性
 - ・支援をする上で心がけたこと
 - ・黒田さんが考える専門性とは
 - ・その獲得にはどんなことが必要か
- ④就業体験的ボランティア事業の今後
 - ・黒田さんからみた本事業の可能性
 - ・黒田さんからみた本事業の限界
 - ・どのような評価軸が有効か

■黒田さんの略歴

黒田さん（仮名・女性・40代前半）は、2005年春、釧路市の自立プログラムの草創期から5年間、自立生活指導員を務めた。聞き取り時は、雇用期限が終わり、別の仕事に就いていた。語れる範囲でお願いしたところ、次のように経歴を話してくれた。

家庭の経済状況もあり、日中経理事務として働きながら関東にある大学の商学部二部を卒業した。就職後に、いくつかボランティア活動に参加したという。釧路に戻ってきて、しばらくして結婚。夫が転勤族だったので道内を転々とした。

離婚後、3名の子どもを引き取り、10年ぶりに職を得るためには資格が必要だと考え、専門学校に自費で通った。さらに、働きながら4年生の通信制大学で教員免許を取得後、学習塾のアルバイト講師で、高校の時間講師などの仕事をかけもちした生活を送る。塾が社員契約になるもその分仕事が忙しくなり、「親としてはまずい」と考え、生活は不安であったが、育児に専念することした。失業保険が切れた後、職業訓練に半年間通い、ハローワークで求職経験をした。

2005年3月、職業訓練も終盤に近づいた頃、「絶対ここが受かりたい」という就職試験に二次試験で落とされた。子どもの仕送りが目前に迫り、焦っていたときに、福祉事務所の求人票を発見した。高齢者の生活支援関連の求人に応募し面接試験を受けた。後日、自立生活支援員の方の面接を受けないかと誘いの電話があり、採用されるに至る。以前勤めていた学習塾にアルバイトとして雇用してもらい、ダブルワークで生計を維持することにした。調査時も、同様の生活であった。

【面接調査2】大牟田市自立支援相談員

佐藤さん（仮名・女性・20代半ば）

■日時と方法

協力者：太田さん（女性・20代半ば）

日時：2010年12月

会場：大牟田市生活保護課

方法：聞き取りは添田が実施。半構造化インタビューで約1時間。

事前に用意した質問の柱：

①プロフィール

- ・経歴、職歴、応募動機、自立生活指導員として働きはじめたこと

②就業体験的ボランティア事業における自立過程

- ・印象的なエピソード、就労にいたった例、就労を左右するもの

③自立生活支援員の専門性

- ・支援をする上で心がけたこと
- ・佐藤さんが考える専門性とは
- ・その獲得にはどんなことが必要か

④就業体験的ボランティア事業の今後

- ・佐藤さんからみた本事業の可能性
- ・佐藤さんからみた本事業の限界
- ・どのような評価軸が有効か

なお、太田さんのインタビューの前に、プログラム参加者の聞き取り調査を行っており、それに関連した補足質問に時間を行った。その関係で詳しく聞けなかった項目もある。

■太田さんの略歴

太田さんは（仮名・女性・20代前半）、2008年から大牟田市の就業体験的ボランティア事業の立ち上げに伴い雇用され、プログラム

の企画・立案・実施を担当している。

専門学校で社会福祉を学んだ後、大学文学部に編入学した。卒業後、市内の病院で社会福祉士として勤務していた。精神保健福祉士資格をとりたかったが、その病院には精神科がなく、本格的な精神障害をもった方とのふれあいに資格を取ることに抵抗があったという。「このままじゃまずいな」と思っていた頃、同じ職場の先輩から大牟田市が自立支援プログラムのお話を聞き、応募した。

もともと福祉関係の仕事に強い関心があったわけではなかったという。きっかけは、高校3年生の時の受験に「失敗」したことであった。志望大学に「落ちると思ってなくて、滑り止めを受けてなかったんで、あせって受けたのが専門学校」だった。思い描いていた進路から大きく変更になった専門学校を当初はやめようと思っていたが、結局、社会福祉士の任用資格をとり卒業した。その後、大学の編入試験を「受けたら、受かっちゃって、なんだかなと思って」生きてきた。

「福祉の方にめざめたのがここだったような気がします」という。大学受験に失敗したことを引きずり「転落した気分」になっていたが、自立支援プログラムに関わることで、気持ちに変化が表れた。保護受給者と接する中で、「絶望って言うのを味わったことがある方ばかり」だったので、「自分があますぎたな」と思うようになった。

当初は、他に苦しんでいるひとがいっぱいいる中で「どうして生活保護だけ」という思いもなくはなかったが、一人一人と話をするなかで、「生活保護の世帯がもつ生きづらさというのが見えてきた」。そうすると、「ただボランティアをさせて、がんばってねっている人間」に留まるわけにはいかなくな

った。事業をどうにか利用して、「自己実現」を援助したいと思うようになったという。

筆者の太田さんの印象は、努力家で仕事への責任感が強く、聡明な方だというものだった。また、同僚や生活保護受給者との接し方から、正直、社会人になって数年しかたっていないと聞いたときは驚いた。

現在、ひきこもりや不登校経験者の学習支援のボランティア活動にも参加している。

3 結果

分析の結果、ふたりの実践から次の九つのカテゴリーが生成された。

一つ目は、人間の尊厳に対する確かな感性と人間の可能性への信頼である。

二つ目は、参加者の警戒感や不安を取り除くヒューマン・スキルである。傷つき体験をしてきた人たちの心情を察しながら、共感的に関わり、対話を生み出す力が必要である。

三つ目は、自らの経験から相手の立場を推量する「成り込む」力である。「成り込む」とは、心理学者の鯨岡峻によって提示された概念で、他者の情動を間主観的に理解する、感じることを意味する。その出発点は、自分の経験である。一般論として判断するのではなく、自分が相手の立場だったらどうなのかという意識をもつことで、当事者性が生まれている。

四つ目は、「働く」ことの喜びややりがいを可視化させる力である。「生活支援・社会参加」型のプログラムは、参加者にとっても、担当ワーカーにとっても成果が見えにくい。そこで自立生活支援員などの担当者は、労いや感謝などの声かけなどを通じて、活動に興味づけを行いやりがいを創出していた。また、

笑顔が増えた、表情が明るくなったなどの微細な変化をワーカーに伝えていた。

五つ目は、行きつ戻りつすることを許容する発達観と「待つ」ことへの耐性である。直線的な発達観ではなく、時に期待を裏切られても信じて関わり続ける忍耐が必要となる。

六つ目は、未踏の事業を開拓することを楽しむパイオニア精神と創造性である。

七つ目は、他者と協働関係を築くための時間と労力を惜しまない姿勢である。「生活支援・社会参加」型のプログラム開発には、NPOや企業の協力なしには成り立たない。

八つ目は、プログラムのマッチング作業における当事者性と「翻訳力」である。ここでいう当事者性とは、当事者側の立場や思いに沿った判断である。「もし私が彼・彼女の立場だったらどうだろう」という問いを絶えず繰り返しながら受給者と向き合うことある。

「翻訳力」とは、一つには、そうした受給者の声にならない声を言葉として聴き取る力をさす。人は誰かと話すことで、自分が何者であるか、何がしたいかを同時に形づくっていく。語る事が現実をつくる。アセスメントの重要なデータとなるのが、受給者の語りである。語りが生まれやすい雰囲気づくり、途切れかちな言葉を補足すること、そうした「聴く耳」や姿勢をもつことを意味する。もう一つには、受給者の生活者としてのニーズや困り感を自立支援プログラムのみならず、既存の施策や制度を最大限の読み幅で解釈しながらすり合わせていく力をさす。

九つ目は、アセスメント能力とクールな状況判断である。受給者に対して、共感的かつ受容的に接しつつも、現在の能力や特性を的確に査定し、冷静な判断のもとで受給者に接していくことが求められる。

3-1 人間の尊厳に対する確かな感性 と人間の可能性への信頼

【黒田さん】

近所に生活保護で暮らしている独居老人がいた。家庭菜園で採れたを差し入れたりする程度の関係であったが、その方が突然亡くなられたと聞いて、「すごいショック」だった。何か自分があの時声をかけていれば良かったかなとかね、そういう思いも挽回できるかなって。

別にその専門性は必要ないと思います。けど要は人を大事に思えるかどうかだけかな。あとは自分とその人の立場は結局同じというか、助ける人、助けられる人じゃなくて同じ立場かなってところが抜けてなければいいのかな。

最終的に別に保護なんか受けたくなかったけど、受けざるを得ない状況になったっていうことになると、ある種心に傷があるっていうか、そういうものがあるからその部分は労わってあげるって言うのはおかしいけど、大事にしてあげないと。いつまでも上下関係で上から物言いだったりとか、ダメな奴だっと思われたりとか、それってどうって。自分だっって頑張りたいのに萎えてくるじゃないですか、気持ち。だけど自分はこんなことが出来るよ、あんなことが出来るよって実際やってみて分かったときに、「あ、自分って出来るじゃん」って。外に行くのも怖くないねって。引きこもりしていたとしても、怖くないんだね、人の役に立っているんだって思うと嬉しいし、やっぱり最終的には人と人と

のつながりがないと人間ってダメかなって。その中で人から認められたり、自分自身で自分を認めたりとかがないと、やっぱり元気でやっていけないって、そういうのを感じたりして。

そこ（＝生活保護）から出ていくのは怖いじゃないですか。病院代も自分で払わなくちゃなくなるわけだし。何があるかわからない訳。うるさいことは言われたくないけど、きっと怖いと思うんです。

【太田さん】

諦めっていうのがやはり、ずっと不採用不採用と重ねられると、自分が本当に使えない人間じゃないかって評価が格段に下がっていく。自分は何でもやれるっていう気力をもっていたとしてもですよ。だからその回復をどう図っていくかってことですよ。

3-2 参加者の警戒感や不安を取り除く ヒューマン・スキルと配慮

【太田さん】

電話で引かないようにって言うか、この人いるんだったら大丈夫だっと思ってもらえるように大事に。（略）あと、時間とか地図とかわからないようだったら送りますよってセットにして。あと、バスの時間とかわかりますか？何線にいつも乗ってますか？（略）着いた頃にわからなかったら電話もう一回くださいねとか。

（受け入れ機関には）ただ説明会のとき行くだけじゃくて、何回か三ヶ月に1回とか二ヶ月に1回とかとにかく全部ぐるぐる回る。あ

る程度慣れた頃にもう一回回って、一緒に（作業を）やりながら「どう？」なんて話したりとか、みんなの様子、何か困っていることないかなとか。（略）私、ケースワーカーと違ってお金預かっている、あなたにお金渡しますっていう立場じゃないので、勿論上下関係ない、上下関係ってそういう関係で言ったらおかしいけど、そういう繋がりが全くないので、一緒に時々ボランティアやる人ってそういう感覚なので、あとはちょっと心配してくれる人って、何か要望あれば聞いてくれる人って感覚だと思うので、その編は冗談も言ってきてくれたり、（略）要望があればふつうに言ってもらえる関係を作るといふか、まあそんな感じですね。

初めてのものっていうのは、誰でも怖いんですよ。本当に福祉事務所でボランティアって何これみたいな。何か怪しい者ではありません。そういうのが伝わらないと出てきてもらえないので、「怖くないよ一大丈夫」って楽しんでやるぐらいで「絶対やれ！」じゃない。そういう部分は（参加者に）わかってほしいから。

同じ釜の飯を食うじゃないけど、そういうこと（＝受け入れ機関を訪問し、一緒に作業すること）をしないと人ってひらかれないじゃないですかね。私は怖くない人ですって言ったらおかしいけど同じ、だってたまたま今回自立支援で採用になったけど、これがなければ同じ立場、逆転してるかもしれないわけですから。私も母子家庭ですしね。だと思おうので、なるべく役に立ちたいっていうのもおこがましいですけど、役にもたちたいし、そういう感じですかね。

【太田さん】

本人さんも不安だと思うんですよ。いきなり来た人が、（面接用紙の）ここらへんに聞いてもいない情報を書いているっていうのを見たら。「なんだこいつ」って思うかなって。それで不信感をもたれても嫌なので、そこはまっさらな気持ちでいた方が、私はプラスだろうし、相手の気持ちもよく聞ける。真っ白いのが、真黒く埋まっていくと（＝何も書かれていなかった面接用紙がやりとりしていく中で項目が埋まっていくこと）本人さんも自分の言っていることが伝わっていると思ってくれてるのかなって。

キャラ的にもともと暗いわけじゃないですからね。ただ努めて明るくしようとしているわけじゃないし。とりあえず、この人と話してよかったとか、苦ではないっていう状況を作らないと、本人たちも話しにくいじゃないですか。

3-3 参加者のニーズのマッチング作業 における当事者性と「翻訳力」

【黒田さん】

手順は次のようである。電話をする前に、担当ワーカーからなるべく情報を引き出す。そして、次のように声をかけるという。腰痛でねって言ったら、例えば本人が草刈りをやりたいって言っても、「あ、腰痛なのか」って解るからもう一回お電話したとき、「何々さんお手紙いただいてありがとうございます。草刈ってことですけども、体調的には大丈夫ですか？」「いや腰痛なんだよ」って向こうがおっしゃれば、「じゃあ座って

するのもありますよー。こんなのもありますよー」「じゃあ座るのがいいかな」「じゃあ、それやってみましょうか。まず説明会するので、私玄関で待ってますから」

【太田さん】

基本的にみなさんの考えを大事にしていますよ。ただ、修正というのはちがうんですけど、本人に意欲をもってもらうためためには働きかけとか促しというのがあるんですよ。面接しながら、それはたとえば「どうして？」っていう促しがあってこそ本人の回答があるじゃないですか。その回答がないままに支援はできないのかなって。とにかく本人とじっくり話をすることとは思ってます。あとは、本人さんの性格を分析すること。やはり面接するだけじゃわからないというものもあるからですね。そこはお話しして、ある程度自分なりになんですけど、こういう人にはこういった考えの持ち主なんだろうなって、それを確実なものにしていってアプローチするようにしています。

3-4 自らの経験から相手の状況を 推量する「成り込む」力

【黒田さん】

知り合いもいないような所だったので結構心細いかなということはありませんけど。

その10年くらいブランクがあっただけでなくなったおきパソコンの時代がきていたんですよ。

「絶対ここに受かりたい。私がまっているのはここだろうってところがあった」。生活費

も十分何とかかなるところで、一次選抜を合格し、二次の面接では「どうしてもなんかこう話しているのに空回りみたいな」。「残念でしたってときは、もう泣きましたね。もう訓練も本当に終わりの方で、3月に押し押し迫っていて、(略)4月からは仕送りがあるでしょうってなんとかしないって

「あんた面白い人だな。そんなの持ってくるひといないよ」ということになって。ただ子どもが小さいから結構不規則な時間帯にもなる仕事だから今回はちょっと難しいねってことでそこはお断りしたんですけど。

自分が失業していたときとかもあるし、何回応募しても落ちるとかね。多分同じ気持ちだったと思うんですよ、参加している皆さんもね。何回行っても「仕事行け」って言うけど応募できるものがない訳ですよ。皆さん無かったりとか、落ちちゃったりとかね。何回も挫折を味わって、最後は泣きですよ。「何で受かんないの」って。泣きになるわけですよ、自分もあるしね。あとね、自分が昔から結構「人から言われたくない」って。人から押し付けられるの嫌じゃないですか。(略)自分自身がそうだから、やっぱりありがとって言われて嬉しくない人はいないし、何回も何回も挫折があっただけで、最終的に別に保護なんか受けたくなかったけど、受けざるを得ない状況になったってということになると、ある種心に傷があるって言うか、そういうものがあるからその部分は労ってあげないと。

【太田さん】

自分が失敗した挫折の経験があるから転落した気分になっていたんですけど、こちらに

きたらですね、みなさん私なんかよりも暗い
というか絶望っていうのを味わったこと
ある方ばかり。「ちょっとこれはいかんな。
自分が甘すぎたな」って。はじめは事業に関
して「どうして生活保護だけ。他に苦しんで
いる人いっぱいいるのに」って。現実みなさん
個人個人とお話しをすると苦しみを抱え
てあったりとか、生活保護の世帯がもつ生き
づらさというのが見えてきたんです。そうな
ってしまったら、ちょっと事業をどうにか利
用して利用者さんたちの自己実現とか、本来
あるべきところに目を向けさせないといけ
ないのかなって思ってきたんです。そこがな
ければ、ただボランティアをさせて、「がんば
ってるね」って言っている人間だったと思
います。福祉の方に目覚めたのがここだった
ような気がします。

3-5 行きつ戻りつすることを許容する 発達観と「待つ」ことへの耐性

【黒田さん】

ある女性は一人暮らしでヘルパーやってた
んですけど、たった独りぼっちで腰を悪くし、
無職で家にいてもテレビで悲しい曲が流れ
ると涙が出てくるんですって。(担当のケー
スワーカー)もこれは今違うでしょうって
いうことで、私を呼んでちょっと話して「や
一人でいても気晴れないから、ちょっと週1
回くらいボランティア行かない」って話をし
たり。だから行きつ戻りつ。それでもやっぱ
り(他者や社会と)繋がりがあがる(ことが大
事)という感じ。

この人また来ちゃうかもっていうのは、ある
人にはあると思います。でもある程度こう段

階を踏んでいっている人には、ちゃんとステ
ップアップしてねっていう思いはあってや
っていると思います。(略)無理のないとこ
ろから自分でやってみるっていう。

【太田さん】

底着き体験ってあると思うんですよ。一回
ですね、転落してとまるじゃないですか、自
分の中で。「あつたダメだ、あつたダメだ」
って悲観的な思いになっていると、もうあと
は這い上がるしかないんですよ。底に着い
ちゃえば留まっているか上に行くしかない
んですよ。

あつち(受け入れ機関)から来ないかって言
われたんですけど、本人は断ることはないか
なって。「働きたい働きたい」って言ってい
るから。ただ毎日30分の通勤、自転車通勤
ですから、がんばれば私はいけるんじゃない
だろうかって思ってたんですけど。本人さん
は断って。あーって思ったんですよ。朝の
30分はがんばれないのかなーって。多少自
分に甘いところ、それぞれあるから、難しい
ですよ。

3-6 未踏の事業を開拓することを 楽しむパイオニア精神と気概

【黒田さん】

久しぶりに仕事もするし、たまたま面白そう
だなって仕事があつてそこに面接にいきま
したら、自分でこんなことしたらいいな、あ
んなことしたらいいよなっていう仕事で事
務とかの仕事じゃなくて、何か作っていく感
じで。面接のときに提案しちゃったわけ
ですよ。こんなのでしょうか、みたいなこと
で。

私、前の広告屋（の仕事）でもそうじゃないですか、新たにつくっていきななきゃならないんですね、人のニーズにあわせてとか、動きにあわせてとか、興味にあわせてとか作っていくことが嫌いじゃないんですよね。そういうものが好きというか。じゃあ自分になんか求められているか、福祉系卒業していないから、じゃあ何が求められているのかなってことも知りたかったし、（他の自治体の取り組みや先行実践などの）「何か読むものをください」って読むものもらって読んで、自分なりに考えて「こういうことかな」っていうのがあったので、パソコンをたまたま使いたので書いたりして。

当時は、ケースワーカーと保護受給者双方に、自立支援について理解してもらう必要があった。今では全国的に注目を集めている釧路市でも、「同好会」として一部のもの好きがやっていることという風潮だったという。そうした風当りは、鈴木さんにも向けられた。「こんな人雇ってどうするんだろうね」と言われたこともあるという。

内心ね、「こんな人って私の何をしているんです」みたいな。「こんな人」って言われないう頑張るしかないなあって言うのがありまして。

【黒田さん】

- ・訪問調査の移動中の車内で、「自由にまかせてくれるからやりやすい」と述べていた。
- ・「研究」「分析」ということばをインタビュー中に多用していた。

3-7 他者との協働関係をつくる

手間と暇を惜しまない姿勢

【黒田さん】

上から物言いかやあってよ、とかじゃなくて、何気にしっとり、じんわりと入って気づいたらいたみたいな、そういうのがいいな—なんて思って、「私はいます」と言うのをじんわりじんわり、こうね（笑）。だからはじめのうちは、まずたくさんの方がいるから名前覚えたり、似顔絵描いて名前を覚えたり。

事業所（＝受け入れ機関）の人ともしょっちゅう出入りするような感じにしている。事業所ともいい関係を作っておかないと「この人はこういう方だからおろしくお願いします」とか事業者さんも「この人のことで困っているんだよね」ってきたら、その辺をよしにしたりとかですね。そこしか行くところがないので、あるとしたらそこに自分で行くしかない。

【太田さん】

介護施設は頻繁に行くと邪魔になるのであまり行けないけど、大体3週間、1ヶ月くらいですね。ほかの用事で行ったときに「どうですか」ってことくらい。

3-8 「就労」への間口を広げ、

「報酬」を可視化させる力

【黒田さん】

上から目線で物言って「あんた、これ整っていないからやりなさい」って言われるとやり

たかなくなるじゃないですか。そうじゃなくて、「当てにしています。よろしくね」とか「やってもらって嬉しいよ」とか「ありがとう」とか言われると「やってやってもいいかな」とか「ちょっとやりがいがあるかな」とか「自分のことわかってくれているんだ」とかそういう部分があると自然にやってみようかなって言っているうちに（生活）リズムが整っていく。だから、何かの目的のためだったら人は頑張れるじゃないですか。その部分ではこの部分はすごく良かったのかな、なんて思うことで（頑張れる）。

そうした成果の可視化は担当ワーカーにも伝えられる。多くのワーカーたちは、成果を実感しにくいなかで仕事にやりがいを見いだせずにいるという。そうした状況にあって、鈴木さんのことばは日々の仕事に確かな手応えをくれる。

（担当ワーカーは）今までの経歴のその人しか知らないから「あーこうなってたんだ。続いているだ」って感じて、見る目がちょっと変わってくるっていうかね。それとか「すごく楽しいんだよ」なんて話される方だと「あー楽しいんだ。行って良かったね」てことになってくるので見え方も変わってくる。「なかなか仕事探ししないし、この人は」って思ったり、「パチンコ屋ばかり行ってこの人は」なんて仮に思ってた人が「あーそっか。ひとのために一生懸命やってるんだ。あー行くところなかったからしょうがなくパチンコ屋ばかり行ってたんだ」とかね、そういう目が変わってくるんですよね。（略）いろんな角度から見ると繋がりとかがあるから、その人について立体的になるって言うか。

【太田さん】

（調査時に動物園で筆者が見たように）あんなにざっくばらんに話しているわけじゃないですよ。一回行ったら全員に話かけるということを自分の中に決めているんですよね。全員に声をかけて、体調を聞いたりとか、そういうのを確実に行うようにしています。誰誰に話して誰誰に話さないっていうのは不公平を感じますからね。

3-9 アセスメント能力と

クールな状況分析

【黒田さん】

車持っていないからそんなとこいけないって言ったりね。でもね、やる気さえあれば歩いてだっていけるです。こんな厳しいこと言ったらどうよって思うんですけど。ちょっと早く起きて歩いてだって、自転車でだって行く人はいくし。（略）車がないと出来ないんだって思い込みが人を縛ってしまうというか。

お金大事ですよ、大事ですけど、ただお金をくれればいじやどうにもこうにもなんない。訓練も大事なんだけど、資格取れば少しは広がりますよ、でもパソコン資格とか医療事務資格取ったからってそれだけで就職できるところがあるかっという。特に医療事務なんてほとんどないですよ。しかも出てくる求人は経験者のみ。

上から物言いかやあってよ、とかじゃなくて、何気にしっとり、じんわりと入って気づいたらいたみたいなの、そういうのがいいなーなんて思って、「私はいます」と言うのをじんわ

りじんわり、こうね (笑)。だからはじめのうち、まずたくさんの方がいるから名前覚えたり、似顔絵描いて名前を覚えたり。

かなり前にホテル業されていた方で、けど全く歯がなかったんですよ。(略) 保護でもなんでも活用して歯を入れてしまってそれから探されたほうが可能性は高いと。十分に国で保障されているものだから申請が上手く通れば、ちゃんとそこをきちんとしてから応募した方が彼にとっていいんじゃないかなって。いや歯がないなんて言うのも失礼かと思ったんだけど本当にその人のためを思ったら言わさったって。(略) 活用できるものは活用したらいいと思います。

【太田さん】

介護の方に関しては、患者さんを傷つけるリスクもありますし、障害者の方に関しては不適切な発言を控えていただかなければならないので。

動物園に関しては、そうですね、チームの色があるからですね。Mさんたちのチームは仲が良く、話しながらやってくれるところなんで気軽に「元気してるとねー」って入っていくんですよ。で、あっちも私が来たら手を振ってくれるような感じているんですよ。ただ、他のチームでは一歩引いたり、おとなしいチームもいるからその時は「大丈夫ですか」って丁寧な感じで。その色によって使い分けて。

おわりに

本稿は、「生活支援・社会参加」型の生活保護自立支援プログラム担当職員に求められる専門性と役割について、実際の職員の職務実態から抽出することを試みた。結果として示された9つの項目は、ある程度一般性をもつものと思われるが、今後、現場と協議しながら検証されていく必要がある。

また、担当職員の専門性は、プログラムの成熟度によって変わることが予想される。その意味で、今回明らかになったことは、草創期に求められるものといえる。

最後に、本稿は、一次分析レベルにとどまった感は否めない。役割と専門性との関係を構造的に示す必要がある。今後の検討課題としたい。

引用・参考文献

- 釧路市福祉部生活福祉事務所編集委員会編
2009『希望をもって生きる—生活保護の常識をくつがえす釧路チャレンジ』CLC
鯨岡峻 2006 ひとがひとをわかるといふこと』ミネルヴァ書房
添田祥史 2010 「生活保護受給者の生活現実と自立支援プログラム」『釧路論集』第42号

2 生活保護受給世帯の子どもの高校進学支援事業調査報告

2 生活保護受給世帯の子どもの高校進学支援事業調査報告

添田 祥史・成澤 弘明

【要約】

子どもの貧困は重層的な傷つき体験であるという。彼・彼女たちの多くは、経済的な厳しさと家庭の文化資本の乏しさから、学業達成を果たすのが難しく、将来に夢や展望を描くのが難しく、自己肯定感をもてずにいる。筆者らは、その対抗実践として、生活保護受給世帯の中学3年生を対象にした高校進学支援事業「Zっと! Scrum」に着目する。全国的に高い注目を集める当該実践に、スタッフとしての役割を果たしつつ、約1年間のフィールドワークを行った。

貧困問題の克服は、希望を語る身体の回復が不可欠であるという問題意識のもと本稿では、とくに子どもの自己肯定感の獲得プロセスの解明に焦点を当てる。M-GTAを用いたモデル化の結果、鍵となるのは、仲間やスタッフからの絶え間ない「私」任せのかかわりであった。すなわち、「私」に向けられた言動をどう受け止めどう反応するかは、当人に委ねられるという関係性を基盤に、子どもたちは他者への関心を取り戻し、肯定的な自己へと変化していった。

1 問題の所在

1-1 貧困の連鎖を断ち切る方策

—基礎学力と希望の同時保障

本稿では、釧路市における生活保護受給世帯の子どもの高校進学支援事業の実践分析である。今、同市の取り組みに熱い期待が寄せられている。それは、進学実績としても着実に成果をみせつつ、かつ希望を語る身体を子どもたちが再獲得していることにある。当該実践の子どもの語りの録画映像を目にしたものは、皆一様にその言葉の力強さに感動する。そこには、子どもの貧困を断ち切る確かな方向性が示されて

筆者らは、とくに当該実践の子どもたちが、明らかに自己肯定感が向上していると思われる語りが飛び交うという事実に着目する。そこには、貧困層のみならず現代日本社会が抱える喫緊の課題としての子どもの自己肯定感の回復に対する確かな解決の方向性を指し示していると感じるからである。

子どもの自己肯定感の低さが社会的問題となっている(高垣2004、澤村 2003)。進学意欲、学校適応は相関関係にあることが指摘されており(松井 2001、久芳ら2007)子どもの発達支援上の重要な課題として認識されている(中教審 2008)。

これまで、自己肯定感に関する研究は、自

己肯定感尺度の開発、他の尺度との比較研究などが主であった(田中 1999、松井 2001 など)。しかし、子どもたちに自己肯定感の獲得を促すために必要な援助実践の視点や方法に関する研究は、臨床家による提言レベルにとどまり、実証研究の蓄積が求められる。すなわち、どのようにして子どもたちは自己肯定感を獲得していったのか、それを後押しした環境や条件は何かについて、実際にそれが生じた現場でデータを収集し、分析していく作業が必要となる。本研究は、そうした事例研究の一つとして位置づく。

なお、本研究では、高垣(2004)の議論を参考にしつつ、「自分を構成する性格、思想、身体等に基づいた現状を把握した際、現状から生じる正の側面、負の側面を考慮してもなお、その場に存在する事実を価値を認める感情」として、自己肯定感を用いる。

1-2 研究方法

フィールドワークは、コミュニティハウス冬月荘が主催する高校進学支援事業「Z っと！ Scrum(ずっとすくらむ、以下「スクラム」)」で行った⁽¹⁾。事例選定の理由は、①調査研究に対する現場の理解が得やすかった⁽²⁾、②インフォーマントとの関係性がすでに構築できていた、③自己肯定感が感じられる言動を実際に見聞きした点が挙げられる。

筆者たちは、本格的にデータを収集する以前より、ボランティア・スタッフ(以下、チューター)として活動に参加していた⁽³⁾。子どもたちの変化を目のあたりにしたことから、研究的にこの実践を分析したいと考えるようになった。2009年8月から成澤が、現場での印象的なエピソードや言動をフィールドノーツに記録しはじめ、同11月、OB・OGへの個別のインタビュー

を行った。「明るくなった」「すごく変わった」などのように、自己を肯定的に受け止めるようになったと思われる言動がみられた康平君、夏樹さん、麗華さん(全て仮名)をインフォーマントとして選出した⁽⁴⁾。聞きとりは半構造化インタビューで行った⁽⁵⁾。質問の柱は次の通り。

- ・「スクラム」に参加する前の「私」
- ・「スクラム」に参加した後の「私」
- ・「スクラム」の同年代の参加者
- ・「スクラム」の大人
- ・「スクラム」での悩みや苦しかったこと
- ・「スクラム」に来て取り組んだこと
- ・「スクラム」で嬉しかったこと

データ分析の枠組みとしては、社会学的アプローチを用いている。具体的には、2つのステップを踏む。まず、ウォルマン(Wallman 訳書, 1984)の提唱する編成資源を特定する(第2章)。それを軸にM-GTA(修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)を用いて3名の変化を分析する(第3章)。

ウォルマンは、社会に存在する様々な資源の中でも、土地、労働力、資本といった不平等に配分される資源を構造的資源と呼ぶのに対し、そのコミュニティの成員ならば誰もが利用できる時間、情報、アイデンティティを編成資源と呼ぶ。編成資源をいかに活用するかで、同じコミュニティに属しながらも生活の様式に違いがでてくるという。本稿は、劇的な変化がみられた3名に共通する編成資源の活用方法を明らかにすることによって、自己肯定感の獲得プロセスを抽出しようというものである⁽⁶⁾。

M-GTAとは、木下康仁が開発した質的研究の分析方法である。グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、現場の実情からモデルを構

築していく手法として有効な手法であり、とくに他者との相互行為の変化の説明に適しているという特性をもつ(グレイザー&ストラウス 1967=1996)。M-GTA は、そうしたオリジナル版の特性を確認、復活させ、同時に、そこで未完成のまま課題になっていた部分を独自に解決するために、実際に調査研究を実施した際に生じる問題点を丁寧に検証しつつ、質的研究の方法論として精緻化を試みている(木下 2003)⁽⁷⁾。

以上の手順で行った研究成果の概要を、「スクラム」のチューター会議で報告した。M-GTA では、現場が納得するモデルを提出できるか否かが成果を評価する際に大きなウェイトを占める。本研究で生成されたモデルに対する評価は高く、その解釈に対しても妥当性が確認できた⁽⁸⁾。

2 「Zっと! Scrum」の活動

北海道釧路市米町。神社を右手にある坂を登って少しいくと、二階建ての大きな一軒家が見えてくる。NPO 法人「ネットワークサロン」が運営する「コミュニティハウス冬月荘」である。電力会社の独身寮を改築した施設は、1階が市民活動の場で、2階が居住空間になっている。縦割り行政の弊害によって、漏れてしまうようなニーズを柔軟に汲みとるべく、道州制モデル事業の一つとして建てられた。

玄関から入るとカウンターが目に入る。床はカーペット敷き、パソコンを利用する2階の住人を横目に、ドアの隙間から見えるのは厨房で昼食を準備する専従の調理担当のスタッフの姿。白熱灯の間接照明が心温かい雰囲気醸し出す。「スクラム」のある子どもたちは、冬月荘を「実家のようなところ」、「金持ちの友達の家」と表現している。

家」と表現している。

「スクラム」は、冬月荘が生活福祉事務所から受託している生活保護受給世帯の中学生を対象とする高校進学に向けた学習支援事業の愛称である。Zは「ずっと続きますように」、「かっこいいから」。scrum は、団結を表すスクラムと塾(cram)をあわせてつくった造語である。初年度、予定した回数が終わった時、存続を希望した当時の子どもたちが知恵と思いを出しあってつくった。学習支援の場とはいうものの、活動は子どもたちの居場所づくりや仲間づくりに重きを置いている。したがって、個別の学習支援だけでなく、全員で話し合って企画をたて、バーベキューや料理づくりなどの活動も組まれている。

「スクラム」では、中学生以外は、すべてチューターと呼ばれる。冬月荘関係者、子ども関連の施設職員、生活福祉事務所の関係者、大学生、大学教員など多様な人がチューターとして子どもに関わる。現在では、第1期生、2期生の一部がチューターとして立場を変えて参加するようになっている。

「スクラム」に参加してまず求められることは、自分の呼ばれたい名前を決めることである。これは中学生もチューターも全員である⁽⁹⁾。そのねらいは、「立場を持ち込まない」ことにある。社会的な威信や立場を切り離すことで、対等の関係を確保しようとしている。

チューターとして求められるもう一つの行動原理は、「子どもを評価しない」ことである。厳密にいうと、子どもをいわゆる「良い子」の枠にあてはめて評価することを自制したり、学校での評判や成績を評価軸にしらないことをさす。スクラムでのその子にきちんと向き合うことが求められる。基本的にこの2点さえ守れば、子どもたちにどう接するかは、個々のチューター

一に委ねられる。

おおまかな一日の流れは次の通りである。午前10時頃に集合する。お昼はボリュームも味もよく参加者全員が楽しみにしている。午後1時頃から再開し、3時頃に終了。公共交通機関によるアクセスが難しい者には、送迎がつく。子どもたちの送迎に向かったチューターが戻ってくるとチューター会議が開かれる。会議では、必ず一人一回は発言の機会が用意されている。気になったことや嬉しかったことなどを共有されていく。

3 「Zっと! Scrum」の編成資源

ウォルマンは、編成資源として、時間、情報、アイデンティティの3つをあげている。スクラムでは、それに加え、他の「スクラム」生、チューターという編成資源が存在していた。

3-1 時間

「スクラム」の時間は、中学生当人がコントロールできる。次の夏樹さんの語りからは、そのことが顕著にうかがえる。

チューターたちは、子どもたちに希望校に合格してほしいと思っているので、勉強するようにはたらきかける。しかし、その最終的な決定権は、中学生に委ねられる。また、勉強時間の長さや内容についても同様である。

夏: そう。だからなんか、学校だったら一時間
びっちり勉強。

成: そうだね。

夏: でも冬月荘だったら、自分の休憩したい
時に休憩できるし、わからないところは先生
が来て、個人的に教えてくれる。

学校での一斉授業の場合、子どもたちが時間をコントロールすることは難しい。わからないことがあっても、授業を中断させることになるので、なかなか聞きづらい。ましてや、初歩の段階でつまづいている場合、なおさらであろう。ここでいうコントロールできる時間とは、子どもたちが時間を遡り、わからない単元から学び直すことができることも含意する。

3-2 アイデンティティ

「スクラム」においては、アイデンティティもまた当人が一定程度コントロールできるものになっている。「スクラム」では呼ばれたい名前を自らにつける。これは、「私」は何者かを当人が名乗る。子どもたちの多くは、日常的に呼ばれているあだ名などをつけるが、おとなたちは、「たけちゃん」(50代後半・男性)、「おんじ」(60代前半・男性)、「ひおピー」(30代後半・女性)、「パズー」(20代前半・男性)など日常とは異なる「私」を楽しんでいる。こうしたおとなたちを前に、子どもたちは安心して新たな「私」を試すことができる。

また、「スクラム」は、市内の様々な中学校から通ってくる。当人の所属する家庭や学校や地域における「私」をめぐる呪縛から比較的自由になりやすい。日常の人間関係とは異なるある種、非日常的な空間は、「私」とは何者かを表出し直す機会を用意してくれる。

また、インフォーマントの語り方は、学校や家庭での「私」と対比させる形で「スクラム」での「私」を説明することが多かった。「スクラム」に対する帰属意識もみられた。

3-3 情報

「スクラム」では学校や家庭では得られない同じ境遇の他者と出会うことからくる共感的な言葉やポジティブな未来への情報が提供される。そして、それらの情報を受け容れるか否かも、中学生に委ねられる。

康平君は、学校の同級生を「理解しあえない奴ら」と表現する。他方、「スクラム」は、「何でもさらけ出せる場所」だという。そうした関係の基盤となっているのが、なにげない会話の中に同じ「境遇」だからこそ共感できる体験や感情であった。自分の苦しさを理解してくれる他者がいる。

康:最初の時の募集内容の一つとして、あの、母子家庭であることが絶対条件だったんだよね。だから、そういう、境遇だから、何となくそんな話になって。うん、辛いよねつてこう。(中略)ここは、そういう、何でもさらけ出せる場所だったんだよね。

また、「スクラム」は、日常の関係性とは異なる情報を得ることができる。夏樹さんを取りまく受験に対する情報は、「ネガティブ」なもので溢れていた。彼女にとって「スクラム」は受験への不安を軽減させる「ポジティブ」な情報に触れる場所でもあった。

夏:「スクラム」では、受かる事しか考えてない、みんな。逆にポジティブすぎ?学校の友達は、ネガティブすぎ。

成:ネガティブすぎ。

夏:「絶対落ちる」って決定なの。

3-4 他の「スクラム」生

「スクラム」の子どもたちの人間関係をみていくと、いくつかのグループに分かれていること

に気付く。しかし、互いに牽制しあうでもなく、排除しあうわけでもない。グループ内の拘束力はそこまで強いものではないようである。

すべての子どもたちはいずれかのグループに属している。つまり、スクラムの成員であれば、いずれかの「スクラム」生にアクセスできる。そして、そこには認め合う関係があるという。

康:分かり合える友達っていうのが、ここにはちょっといたんだよね。共通部分がある。で、こう、わかりあえて、あ、わかるよそれって。お互いの傷を舐めあうってことじゃないんだけど、認め合うっていうか、お互いの存在を認め合ってくれて、で、「あ、自分は、この、メンバーっていうか、この冬月荘のスクラムの中にいていいんだ」っていうか。存在、必要とされてるんだっていう。

3-5 チューター

スクラムでは、法人の専従スタッフとボランティア・スタッフを総称してチューターという。ここには、スクラムのOG・OBも含まれる。

チューターは、子どもたちにとってアクセスしやすい編成資源となっている。チューターの子どもたちへの接し方は多様である。何とか勉強に対して内発的な動機を持ってもらいたいと教材を開発する者、高校の進学情報の収集と提供に心血を注ぐ者、受験勉強にポイントを絞って学習支援をしようとする者、おしゃべりをしに来る者。自分の宿題をする高校生や大学生、寝て過ごす者など。学習支援という枠からは、おおよそかけ離れた関わりであっても、「スクラム」では許容される。子どもたちも、勉強する者からゲームやおしゃべりに興じる者まで様々である。

そうした中で、子どもたちは、自分にマッチし

たチューターをみつけていく。大人を「こわい」存在として捉えていた麗華さんは、ある一人のチューターと話すようになってから、周りの人とも話すようになった。大人とのかかわりは、「すごい楽しい」ものとなり、「もっと話したい」と思うようになったという。

4 事例における自己肯定感の獲得プロセス

以上、編成資源論を手がかりに、「スクラム」という場の輪郭を描いてきた。その中で子どもたちがどのように自己肯定感を獲得していったのかを M-GTA を用いて示したものが図1である。以下、概念を【 】, カテゴリーを『 』として表記し、説明していく。

4-1 【「私」を肯定してくれる機会の喪失】

から生じる『避難としての無干渉』

「スクラム」に参加する前の中学生は、『学校』に対して、みんなと仲良くするための自分を作り出すことに【友達疲れ】を感じたり、学校内の規範や文化に対して【均質化への違和感】を抱いていた。他方、『家庭』にかえっても親がいない、あるいはいても自分に関心を持っているとは感じる事ができないでいた(【「私」を肯定できる機会の喪失】)。そのような『学校』と『家庭』の間を行き来する毎日を過ごす中学生は、悩む自分を守るための手段として『避難としての無干渉』を自己防衛として身に付けていく。他者から関心を持たれない自分を守るために、「私」もまた周囲に関心を持っていないのだという論理を組み立て、【周囲への関心の喪失】が生じる。さらに、そこから「私」は他者から興味を持たれていないであろう、だからこの現状は仕方がないのだと【周囲からの関心の喪失感】が常態化していく。

4-2 他者への関心を回復する起点

としての【「私」任せなかわり】

そんな中学生が「スクラム」に参加すると【唐突な受容の試練】を受けることになる。いままで【してくれない】かかわりが生活の多くを占めていた中学生は、なぜこんなことを【してくる】のか理解できず、当惑する。

しかし、チューターや他の「スクラム」生による関わり方は【「私」任せなかわり】である。すなわち、時間、情報、アイデンティティをはじめ他の「Scrum」生やチューターという資源をどう活用するかは裁量権は、拒否するという選択肢も含めて子どもひとりに委ねられている。

そうした他者からの関わりが継続的に提供自分なりの反応を返すことができるようになっていく。受容できた【「私」任せなかわり】は、『学校』や『家庭』では得られない共感できる情報を伴っている。このような情報により、【体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり】を感じるようになる。

他者とのつながりを獲得した中学生は、『他者とのかわりを見る「私」の可能性】を見出していく。【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を感じ、少しずつ「スクラム」での自分に自信を持つようになり、他者と【「絡む」ことへの欲求】が芽生える。チューターの多様な人生経験に触れることで、あるいは自分と同じ境遇を持ちながらも生きている他の「スクラム」生の生き様に触れることで、「私にできることがまだあるかもしれない、こんな人生もあるんだ」といった【見えなかった選択肢の拡大】が起こり、人とのかわりに対する価値観や行動様式が変化していく。また、他者が「私」に心を開いて話してくれたという事実自身が【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を強化させていく。

4-3 【してくる】から【してくれる】へ そして、【してくる】他者を待ち わびる「私」へ

こうした人間関係の中で、中学生は徐々に自分が抱く感情に自信を持つようになっていく。自分が嬉しいことや苦しいことは、【みんな思ってると思う】ことに自信をもつ。他者と共感できる「私」を再発見したのである。

そうなってくると、当初はうっとうしい【してくる】ものであったチューターと他の「スクラム」生の【「私」任せなかわり】は、中学生にとって【してくれる】になる。他者からの働きかけは、「私」への関心や配慮にもとづいたものだというふうに変化軸が変化したのである。

さらにそれは、うっとうしい【してくる】かわりさえも、されなければ寂しさを感じてしまう【してくる】自分の存在を肯定的に認めることができた中学生は、チューターや他の「スクラム」生に【「私」任せなかわり】を働きかけ返す【「私」任せなかわり phase.2】を行うようになり、次世代のチューターとなっていく。

phase. 2】へと発展していく。この変化を促したのが、【みんな思ってると思う】という、共感できた自分に対する信頼である。以上のプロセスを経て、他者からの関わりを受容でき、他者へ働きかけることができる自分に価値を認めるようになる。

4-4 「スクラム」外への波及

また、本研究では、「スクラム」で得られた自己肯定感が、家族関係の変遷を促す事例も見られた。「褒めたら伸びるタイプなのかな」と自分を評価する夏樹さんは、中学校1年生頃までは家庭でも勉強をしていたという。しかし、「誰が褒めてくれるわけじゃないし、一人で虚しく勉強してて、なんか、つまらないかなと思って」やめてしまう。自分を肯定してほしい場面に期待通りの反応がも

らえなかった。彼女にとって、『家庭』は自分を肯定してくれる場としての地位が低下していった。

そんな彼女は、「スクラム」に参加するようになって、再び家で勉強するようになる。チューターや他の「スクラム」生が努力する姿を認めてくれたからである。彼女に「スクラム」に来ての変化を尋ねると「家で勉強するようになった」と答えた。さらに、続けてこう語った。

夏: で、初めて家で勉強した時に、お母さんが、「ココア入れてあげる」つつって、いきなり、部屋入ってきて、ココア置いてってくれた。すごいあん時感動した。

「スクラム」に参加するなかで得た【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】は、彼女をして、再び家庭でも机に向かわせた。その変化に呼応するかのよう、母親がココアの差し入れをしてくれた。このやりとりは家庭における【肯定されるべき「私」の確認】の成立を意味する⁽¹⁰⁾。

5 終章

事例には他者と共感できる情報や、学校や家庭とは異なる時間の流れ、評価軸が配置されていた。こうした資源に加えて、子どもの変化には、共感できる仲間と受容的な大人の存在が不可欠であった。

同じような境遇にあるがゆえに、わかりあえる同年代の他者は自己肯定感の獲得には不可欠であった。経験や感情に対する共感が、他者への関心を取り戻し、他者に共感できる自分の再発見を促す。

配慮ある大人もまた自己肯定感の獲得には不可欠であった。インタビューの対象となった子ど

もたちは事業への参加当初、スタッフの一方的かつ積極的なかわりに戸惑っていた。しかし、そのかわりに対する反応は、子どもたち側に委ねられていた。子どもたちたちはスタッフのかわりに思い思いの反応を見せ、自己開示し、開示した自分が受容されていくことを実感していく。

最後に、事例で獲得された自己肯定感の質について触れておきたい。高垣(2004)は、自己肯定感を「共感的自己肯定感」と「競争的自己肯定感」とに区分する。前者が他者と共感できる存在としての「私」に対する信頼や肯定の感情を指し、後者は他者との優劣の関係の中に自分の存在意義を見出すことである。「スクラム」の活動の興味深い点は、高校進学支援といういわば学歴競

争社会におけるトラッキング・システムの一翼を担いながらも、そこでは「共感的自己肯定感」の獲得を促していた点にある。本研究が提出したモデルの厳密な適用範囲は「スクラム」に通い自己肯定感を獲得した中学生に限定されるが、それが競争的ではなく共感的なものであったのかについても間接的に示せたように思う。その意味で、他領域・他分野での応用が期待できるものであるといえる。今後、獲得された自己肯定感が、どのように維持、変容していくのか、それを後押しする要因は何か継続的に調査していきたい。

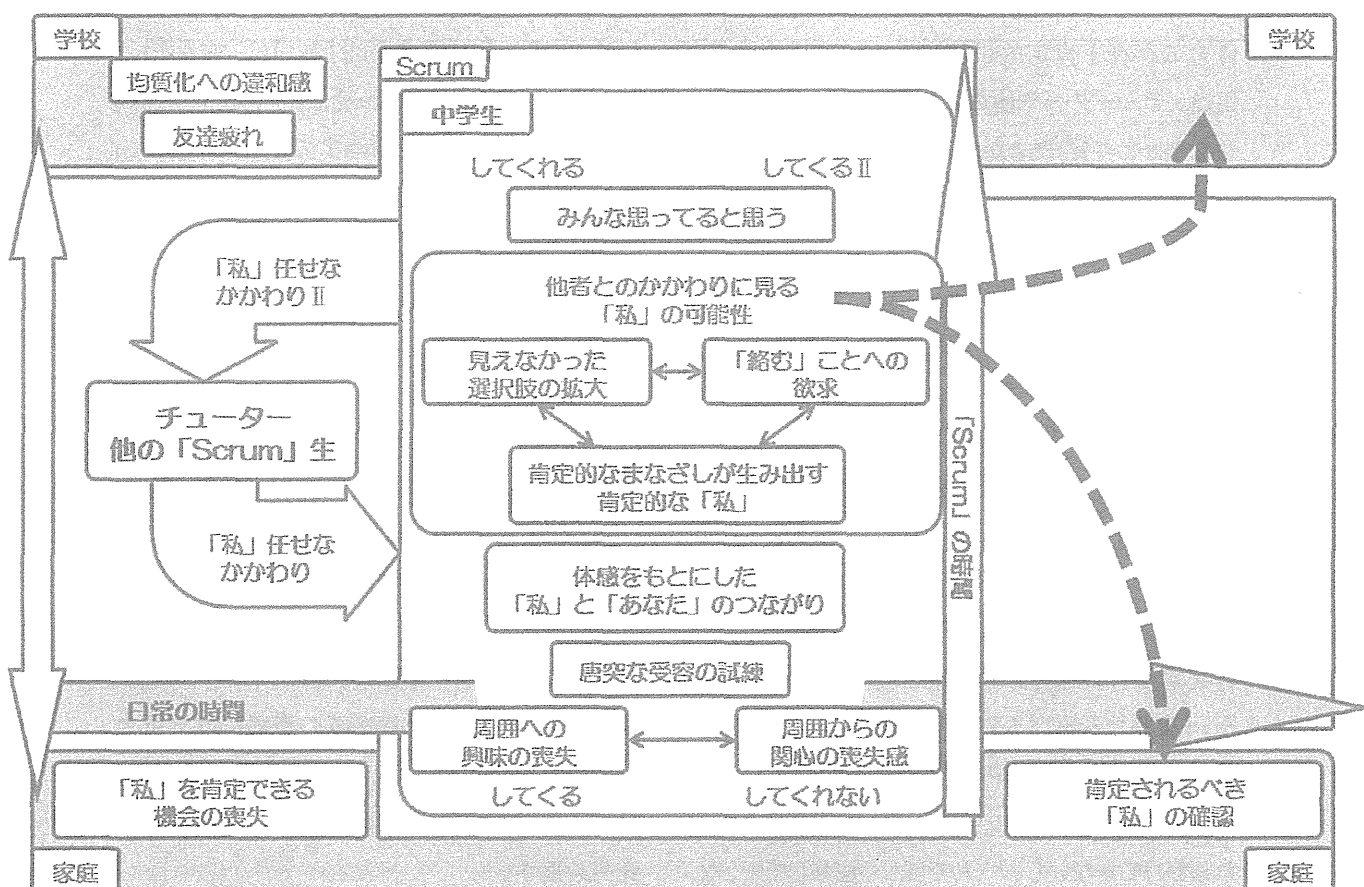


図1 事例における自己肯定感の獲得プロセス